

お転婆<sup>てんぱ</sup>令嬢は婚約者から逃亡中!!

## 登場人物紹介

### ポール

アデルの父。  
貴族らしく鷹揚だが、商人として  
抜け目ない一面も持つ。

### マーガレット

アデルの母。  
おっとりとした性格で  
アデルに対しても優しい。

### セドリック

隣国アーバリー王国の王子で  
高い武力を誇る  
軍隊を率いる軍人。  
なぜか言動がMっぽい。

### ニコラス

アデルの婚約者候補の商人。  
商才はあるのに  
ファッションセンスがない。

### クリストフ

セドリックの部下。  
淡々と仕事をこなす  
有能な軍人。

### アデル

ブランケット家の伯爵令嬢。  
適齢期なのに婚約者が  
決まっていない。庶民と交流  
するのが好きな変わり者。

# 目次

お転婆令嬢は婚約者から逃亡中!!

7

番外編

DM王子の兄弟

243

お転婆令嬢は婚約者から逃亡中!!

## 第一章 ドM王子との出会い

カタカタカタ——と馬車が近づいてくる音に、アデルの耳がびくつと動いた。ほぼ同時に読んでいた本を閉じて机の上に置くと、素早い動きで開けっ放しにしていた窓へ近づいた。

カーテンの隙間から窺った外には、思った通り派手な装飾を施した馬車が走っていた。

（うへえ、今度は馬にまで帽子を被せているわ）

馬は見るからに重そうな箱を引かされている上に、珍妙な帽子まで着けさせられている。おそらく、あのトンガリ帽は他国で流行しているものだろうが、可哀そうに。

アデルは呆れた表情を顔に貼り付けたまま反対側の窓へ向かい、カーテンを縛って作ったロープを垂らした。

「よっ……と！」

しつかりと布ロープを掴み、窓枠を越えると、身軽な動きで自宅の裏庭へ降り立つ。

「ごきげんよう！ ニコラスが参りましたよ」

そんな声が表玄関から聞こえてくるのを聞きつつ、裏門から屋敷を抜け出した。

（まったく、しつこいと思ったら！ お父様もお母様も、あのダサイ脳筋商人に嫁いだなんて、どうか

しているわ）

アデルはラングポート王国の由緒ある伯爵家プランケット家の娘である。

代々治めてきた領地が海に面していることもあって、プランケット伯爵家は昔から外交、特に貿易の面で王国の経済を支えていた。ここ最近では運輸業に力を入れていて、特に最先端の技術を取り入れた造船業に出資している。

そんなプランケット家の現当主の一人娘であるアデルは、すでにこの国の娘の結婚適齢期である十八歳になっていた。

けれどまだ許婚が決まっておらず、両親は娘の嫁ぎ遅れを心配しているらしい。今のところ彼らが娘の相手にと考えているのが、プランケット家と関わりの深い商会の後継ぎたちだ。その中でもここ数年で急成長を遂げたサリンジャー商会の息子、ニコラス・サリンジャーが最有力候補とされている。

（あの人、プランケット家が持っている貿易権が欲しいだけなのが見え見えなのよね）

アデルは町に向かって歩きながら、響めっ面をした。

商人であるサリンジャー家に爵位はないが、彼らは今やプランケット領で一番の利益を上げる商会を営んでいる。それは、プランケット家が出資する貿易・運輸業にも利をもたらししていた。

つまり、プランケット家にとって、彼らと繋がりを持つことは理に適っている。

しかし、アデルはニコラスとの結婚に乗り気にはなれない。彼女には、二人の婚姻で得をするのはサリンジャー側ばかりだと思える。

伯爵の一人娘の彼女を娶れば、ニコラスは爵位を手に入れるのだ。それによって彼は、プランケット家の貿易権を掌握し、ますます利益を上げて確実に権力を強めるのだろう。

それに……

「あ！ アデル姉ちゃんだ！ アデル姉ちゃん！」

アデルが城下町の端にある広場を通りがかったところで、一人の少年が彼女に気づき、手を振って叫んだ。

「こら、アデル様ってお呼びなさい！」

「いいの。私のことは好きに呼んで」

少年と彼を叱る母親のほうへ向かいつつ、アデルは微笑む。

「ほら、アデル姉ちゃんがいいって言ってるもん。それより、アデル姉ちゃん。またあのダサリンジャーのニコラスから逃げてんのか？」

「そうなの。あの人、しつこくプランケットの屋敷を訪ねてくるのよ。本当、嫌になっちゃう」

はあっと盛大なため息とともに答えると、少年は「ハハッ」と大きな声で笑った。そんな息子の態度を、彼の母親が目を吊り上げて叱る。

「サリンジャー商会のニコラス様、でしょ！」

「いてっ！」

ニコラスを「ダサリンジャー」と呼んだ少年が母親に小突かれるのを見ながら、アデルは声を出して笑った。

「あははっ！ そんなに怒らないであげて。『ダサリンジャー』というのは間違っていないわよ。

今日は変な縞々模様のトンガリ帽子を馬に被せていたわ」

「馬にトンガリ帽子？ 変なの」

アデルの話聞いて、少年が眉根を寄せる。彼の母親も息子の隣で首を傾げた。

そう、少年が言う通り、ニコラスは一言で言う「ダサイ男」である。

商会の仕事で外国を回り、各国の流行に敏感な彼の商売センスは素晴らしい。彼の輸入した品がラングポート王国で次々と流行り、売れていることがそれを証明している。

だが、彼自身はとにかくダサイ。

原因は、各国の流行りを闇雲に取り入れてしまうことだ。

単品で見れば素敵なデザインでも、ごちゃ混ぜでは魅力半減——それどころか、それぞれの主張が強すぎて、まったく個々の良さがわからなくなる。東西南北、様々な国からの取り寄せ品見本市のようなニコラスのファッションは、とにかくいただけなかった。

（ビヨウ柄のスラックスにシマウマ柄のシャツで、キツネのファーを羽織っていたこともあったわね）

いつかの動物系ファッションを思い出し、アデルはため息をつく。

統一感など皆無だった奇抜なその組み合わせに比べれば、今日の馬に帽子を被せた程度のファッションはまだ良いほうだった。

「でも、貴族様たちの間では流行るのではないのでしょうか？ 馬に帽子を被せるなんて、斬新な発

想ですよね」

「そう？ またどこかの国で流行していたからやっているだけでしょう。なんでもかんでも真似すればいいってものではないわ。動物に帽子を被せるくらい、ニコラスがやらなくてもそのうち誰かがやったと思うし」

少年の母親が感心したように言うのを聞いて、アデルはフンツと鼻を鳴らした。すると、「その誰か」になるのが難しいんですよ」と彼女が苦笑する。

「それに、その縞々のトンガリ帽とやらも、どこかの国の有名な帽子屋から輸入しているのではありませんか？」

「帽子屋が有名なかどうかは知らないけれど、確かに目立ちたがり屋の貴族たちがこぞって買っているデザインだったわ」

名のある店から買い付けた商品というだけで、貴族たちは必ず食いつく。そうでなければ、社交界で馬鹿にされるからだ。

最新のファッションや話題の店を把握するのは紳士淑女の嗜み。パーティに前回と同じ装いで行くなんて、もっての外。

ニコラスはそういう貴族社会の“仕組み”をしつかり理解している。

元々、陽気な性格で誰にでも親しげな話し方をする男だから、人の懐に入り込むのが得意なかもしれない。

彼は貴族相手にも物怖じせず、積極的に彼らの邸宅を訪問し、営業活動をしているようだ。

いや……勝手にアデルの婚約者になったつもりでいるくらい凶々しい彼のことで、誰彼構わず声をかけているだけに違いない。

「それにしたって、あんなにダサイ男が輸入する品物が片っ端から売れるなんて、奇妙な話よね」

「アデル様……」

仮にも婚約者候補に「ダサイ」と連呼するアデルに、少年の母は困り顔になる。

「偉い人を脅してそうだよな！ あのムツキムキの筋肉でさ！」

一方の少年は、アデルと意見が合う。彼は両腕を上げ、肩の高さで肘を曲げて力こぶを作ってみせる。

少年の言う通り、なぜかニコラスは異常なほどマッチョだった。それも、年々、逞しくなっているようだ。

肩幅が広く、腕も太い。下半身もかなり鍛えているらしく、どこかの国で流行りの細身のズボン

を穿いていたときは、布が破けそうだった。

さらに、鍛えた身体を見せびらかしたくて仕方がないと言わんばかりの彼の服装や態度は、見た目以上にむさ苦しい。

「そうね。鍛えているのも、いつもシャツのボタンが半分開いているのも、そのためかもしれないわ。ひよるひよるの当主やその息子たちには、筋肉を見せるだけで十分脅しになりそうだし、買う

のを渋ったら壁にドーンって穴を開けて見せればいいもの」

アデルは握り拳を前に出し、壁を突き破る真似をする。

貴族の貧弱さに加え、すぐにお金で解決しようとする性質も利用されているに違いない。「さすがにそこまでしたら問題になると思いますよ。でも、アデル様は強い男性と結婚したいのでしょうか？ それなら、ニコラス様はびつたりではありませんか」

「うへえ！ やめてよ」

少年の母親が苦笑しつつニコラスを婿にすすめてくるので、アデルは思わず令嬢らしくらぬ呻き声を出した。

確かに常々「自分より弱い男は嫌だ」と宣言している。しかし、だからと言って選択肢があのもキムキダサリンジャーのみなのは心外だ。

「なあなあ、それよりさ。アデル姉ちゃんはいばらく家に帰れないんだろ？ チェスを教えてくれよ！」

アデルが片手を額に当てて唸っていると、少年がもう片方の手を引っ張った。

「こら、あんたはまた！ アデル様はね——」

「それくらいならお安い御用よ。それじゃ、学校へ行きましょう」

「あつ、アデル様！ お待ちください！」

少年の手を取って歩き出したアデルを、彼の母親が止めようとする。

「大丈夫よ。お父様もお母様も、このくらいのことですぐ怒ったりしないわ。それに、私は屋敷に籠もってお茶会を開くより、こうして街を歩いたり、皆と遊んだりするほうが好きなの」

毎日のように開催されるお茶会で、お洒落や恋愛の話をするだけなんてつまらない。

貴族令嬢として育てられる中、アデルは早々に淑女の嗜みとやらの飽きてしまった。

それで、こっそり——今や堂々と屋敷を抜け出し、城下町でいろいろな人々と交流しているのだ。時間があれば町を散策し、子供たちと遊んだりお年寄りの手伝いをしたり、悠悠自適な生活を送っている。

貴族社会という狭い世界で生きるより、そのほうが刺激的で楽しいと感じていた。

つまり、アデルはいわゆる「お転婆娘」。貴族の間では、庶民との交流が好きな変わり者として扱われているようだった。

だから、婚約者候補がニコラスしかいない……とも考えられる。

彼女が強気な性格であることも相まって、変わり者を嫁にしたいという気概のある貴族子息が現れない。

とはいえ彼女は、今さら猫を被って淑女らしくする気もなかった。周囲の機嫌ばかり窺う意志の弱い男は、こちらからお断りだ。

かと言って、ニコラスに嫁ぐ気もないが……

そこまで考えたアデルは、ため息をついて頭を横に振った。

これ以上、余計なことを思案していても仕方ない。

ひとまず学校にいれば安全だ。

子供たちはいろいろなことを教えてくれる彼女を慕っている。もちろん、ニコラスとの婚約を嫌がっていることも知っていて、逃亡の手助けをしてくれるのだ。



こうして少年と連れ立ったアデルは、すぐに学校に着いた。

「——ああ！ また負けたあ」

「ふふ。まだまだね」

遊び場として開放されている校舎の一室で、チェス盤を挟んでアデルの向かいにいる少年が天井を見上げながら頭を抱える。

「次は私と勝負して、アデル様！」

「僕もやりたい！」

「私も、私も！」

少年とアデルの周りには、いつの間にか子供たちが集まって二人の勝負を見ていた。

「じゃあ、順番を——」

「アデル様！ さつき、ここへ来る途中でダサリンジャーの馬車を見たよ。教会のほうへ行ったら、次はここへ来ると思う」

「ええ？ もう来ているの？」

皆がアデルとの対戦を求めて騒いでいるところに、少女が慌てた様子で部屋へ駆け込んできた。一気に言った後、膝に手をつけて上がった息を整える。

彼女はニコラスの馬車を見かけて、急いで知らせに来てくれたらしい。

ニコラスがアデルを追いかけてくるのは毎度のことと、最近、彼は彼女の逃走ルートを把握し始

めている。彼女が立ち寄りそうな場所を効率良く回るようになった。

「皆、ごめんね。私、もう行かないと。勝負はまた今度！ 次までに順番を決めておくのよ」

アデルはチェスの駒を置き、立ち上がった。

「うん、わかった。アデル様、気をつけてね」

「おう！ ダサリンジャーになんか捕まるなよ！」

口々に答える子供たちは、もちろん彼女の味方だ。

「教会からなら、裏門の道を使うと思うわ。表から堂々と出ていくほうがいいよ」

「ありがとう！ じゃあね」

急いで学校を出て、城下町の中心へ向かう。

中心地は華やかな反面、たくさん建物があつて道が入り組んでいるため、少々地形が複雑だ。逃げ隠れするにはちよつどいい。

途中でニコラスの馬車の目撃情報を集めつつ、アデルは城下町の中心に向かってぐるぐる歩き回った。

しばらくそうして時間を潰し、ニコラスが仕事に戻らなければならなくなるのを待って、屋敷へ戻るのが最善策である。

ところが——

「——失礼、マダム。プランケット家のアデル嬢を見かけませんでしたか？」

「ひ——っ」

路地裏から表に出る曲がり角で、ニコラスの声が聞こえ、アデルは慌てて両手で口を押さえた。もうこんなところまで追ってきているなんて、早すぎる。毎日の追いかけてこで、彼も学んでいるようだ。

アデルは踵を返し、来たばかりの裏道を引き返した。二つ目の曲がり角をさつき通った道とは反対のほうへ進み、さらに奥の細い道へ入る。

すると、ダンツと鈍い音がして、彼女は驚いて足を止めた。

視線の先には、図体のでかい男が二人と、彼らの間に黒いフード付きのローブを着た人物がいる。「こんなところで何してんだって聞いてんだ」

「いえ、私はちよつと道に迷って……」

身長と声から判断するに、ローブ姿の人物は年若い男性のようだ。

「嘘つけ。この家を覗き込んでいただろう？ 怪しいやつだなあ」

「それは、道を尋ねようと……」

大柄な男二人に絡まれて、ローブの彼は明らかに困っている。

(なんだか情けないわね)

おろおろしてばかりのローブ姿の青年に苛立ち、アデルは後先考えず前に出た。

「ちよつと貴方たち！ こんなところで喧嘩でもするつもり？ 二対一なんて卑怯ね」

「ああ？」

「なんだあ？」

大柄な男二人が同時に振り返った。

彼らはどちらもしョウ柄のシャツを着て、そのボタンを半分ほど開けている。シャツの隙間から見える胸筋がどこかのダサイ商人を彷彿させ、アデルは口をへの字に曲げた。

彼らはニコラス信者なのだろうか？

(どちらでもいいわ。今は、ここからどうやって逃げるかが問題よね)

彼女は彼らを睨みつけ、絶対に引かない意思を示す。

少しでも隙を見せたら終わりだ。

ニコラスから逃げつつ、二人の男も撒くとなると……

城下町の地図を思い浮かべ、どのルートを通ればいいのか考える。

アデル一人ならなんとかなるが、ローブ姿の男が自力で逃げられるかはわからない。

二人の男たちと睨み合う場に、沈黙が満ちる。

「おい、この女……」

少しの間した後、男の一人が何かに気がついたように呟き、それを聞いたもう一人も舌打ちした。

「命拾いしたなあ、兄ちゃん」

吐き捨てるみたいにそう言うと、二人は路地の奥へ消えていく。

どうやってここから逃げ出すか考えを巡らせていたアデルは、拍子抜けだ。

目撃者がいたらまずいとも思ったのか。それなら、彼女の口も封じてしまえばいいというの

に……もしかして、怖いのは見た目だけだったのかもしれない。

何はともあれ、助かったことに変わりはない。  
アデルは黒いローブを被った青年に近づいた。

「貴方、大丈夫？」

話しかけるが、青年は何も答えない。

そんなに怖かったのかと、彼女は内心でため息をついた。

確かに大柄な二人に囲まれて不利な状況だったし、恐ろしいと思うのは仕方ない。だが、もう少し気丈な態度を取らなければ、ますます舐められてしまうだろうに。

「ちよっと、何か言ったらどうなの？ それにね、あんなふうにおろおろしていたら、あっちの思っ壺なの。もっと堂々としていないと……ねえ、ちゃんと聞いている？」

青年が何も答えないので、一方的に喋る形だ。

じっと固まったままの青年に痺れを切らした彼女は、彼に迫りフードの中を覗き込む。

「——っ！」

その瞬間、アデルは言葉を失った。

フードのせいでよく見えなかった青年の顔が、あまりにも美しかったからだ。

長い睫毛が縁取られた大きな目、スツと筋の通った鼻、血色の良い薄い唇。肌が日に焼けた色でなければ、深窓の令嬢だと言われても納得してしまいそうだ。

年頃は、アデルと同じくらいに見える。

金髪碧眼は、ラングポート王国では珍しい。どうやら、彼は異国から来た旅人みたいだ。それで、

目立たないようにフードを被っているのかもしれない。

青年はアデルがいきなり顔を近づけてきて驚いたのか、時が止まったかのように動かなかった。

透き通るグリーン瞳が、ただアデルを見つめている。

彼女もあまりに綺麗な彼の顔立ちに見惚れ、二人の間に沈黙が落ちた。

だがしばらくして、ごくりと青年の喉仏が動いたのを見て、ハッと我に返る。

「っ、コホン！ と、とにかく、もつとしつかりしなくてはダメ！」

情けないと思っていた男に見惚れたなんて悔しい。

アデルはわざとらしく咳払いをして、もう一度念を押してから彼に背を向けた。

(び、びっくりした……)

胸に手を当てると、大きな鼓動が伝わってくる。こんなひよろひよろの顔だけ男にときめくなんて、一生の不覚だ。

「美しい……」

「はあ!？」

後悔しているところに青年の声が聞こえ、彼女は再び振り返る。

今、彼はなんと言った？

「美しい」と聞こえたが、一体何が？ もしかしてアデルが思っていたことを口に出してしまったのだろうか。

確かにこの青年は美しい顔立ちだが、それだけだ。

アデルがそう結論を出した瞬間、青年はフードを取り、頭を下げた。そして、彼女に礼の言葉を述べる。

「あ、いや、その……助けてくれて、感謝している……ありがとう」

風になびく長めの髪が、キラキラと輝く。

彼は顔を上げ、笑みを浮かべてアデルを見つめた。

「べつ、別に！ たまたま通りがかっただけよ。口出したのは、貴方の不甲斐なさにイライラしたからで……」

照れ隠しで、つい口調がきつくなる。

だが、青年は気分を害した様子もなく、ひたすらニコニコしていた。

「あ、貴方ね！ 私は怒っているのよ！」

「え？ ああ、そうだね。私は今、貴女に怒られているんだ……！」

頬を紅潮させ、なぜか喜んでる青年を見て、アデルは眉を顰める。

（どうして喜んでるのかしら？）

彼女の怪訝な表情に気がつかないのか、彼は頬を緩めたままだ。顔立ちが整っているので、とても品良く見えるが……

ぞくつと、アデルの背中に悪寒が走る。

（なんだか、これ以上関わらないほうがいい気がする）

「じゃ、じゃあ、私はこれで——」

「アデルー？ アデルー！」

アデルがそそくさとその場を立ち去ろうとしたところ、ニコラスの声が聞こえてきた。

「げっ！ ダサリンジャーのニコラス！」

先ほどまで子供たちと遊んでいたせいか、思わずあだ名を口にしてしまう。

「ダサリンジャー？」

「サリンジャー商会の息子のことよ」

ニコラスの二つ名を知らないのは、この国の呑気な貴族か内情を知らない異国人くらいだ。そして、ラングポルト王国の貴族ならばアデルと面識があるはずなので、やはり青年は旅人に違いなかった。

それはともかく——

「とにかく、逃げるわよ！」

ここで見つかったら、今までの労力が水の泡になってしまう。

アデルは青年の手を取って、ニコラスの声とは反対方向へ走り出した。

「サリンジャー商会……」

「ラングポルト王国で一番大きいと言ってもいい商会よ。いろいろな国で商いをしているから、他国でも有名だと思うけれど、知らない？」

走りながら説明すると、青年は「ああ、知っているよ」と答える。

「でも、貴女はどうして逃げているの？」

「ニコラスの妻にはなりたくないからよ！ それより貴方、宿はどこ？ 道に迷っていたんでしょ？ また逃げる羽目になっちゃったし、ついでに送ってあげるわ」

「ああ、宿は——」

青年が口にした場所を聞いて、彼女はまた絶句する。  
なぜなら、彼が滞在している宿は城下町で一番値段の張るところだったからだ。

建物自体も大きくて目立つし、町の中心にある。城下にいけば、どこからでも見える豪華な屋根が目印だ。

いくら城下町の道が入り組んでいるとはいえ、誰も迷わないだろう。現に、今も黄金に光る屋根の装飾が見えている。

(本当に頼りないわね！)

アデルは心底呆れつつ、彼の手を引いて曲がり角をジグザグに進む。そうして少しずつ目的地に近づき、ようやく青年が泊まっているという宿に着いた。

「送ってくれてありがとう。アデルっていうんだよね。助かった」

かなりの距離を走ってきたのにケロッとしている青年は、そこでローブを脱ぐ。うっすらと汗をかいているが、息も乱れていないし、爽やかだ。

肩で息をするアデルとは正反対。

よく見ると彼は首も太く、肩幅があって男性的な身体つきをしている。立ち姿も背筋が真っすぐ伸びていて凛々しい。

走って暑くなったのか、彼はシャツの袖をまくる。

そこから見えた腕はしっかりと筋肉がつき、さっきまでの情けない姿が嘘のようだ。

なかなか鎮まってくれない脈の速さを感じつつ、アデルは呆気にとられて彼を観察する。

彼の服は明らかに上質な生地を使用していて、普通の旅人とは思えない。首元には、高価そうな金色のネックレスが光っている。近づけばきつと、ローブの隙間からその輝きが見えたはずだ。

ということとは、先ほどの男たちの目的は追いはぎだったに違いない。

「あ、貴方ね……そんな、格好で……あんな路地裏を、ふらふら、してつ……絡まれるの、当然でしょ！」

アデルは息を切らせて指摘する。

なんて無防備なのだ。

最高級の宿に泊まる身なりの良い青年に、用心棒を雇う金がないとは思えない。

「ああ、ごめんね。貴女にも迷惑をかけた」

途端、頬を緩める青年は、到底悪いと思っっているようには見えない。

また苛立ちが込み上げてきて、つい大きな声を出した。

「ちょっと！ さっきからニヤニヤヘラヘラして、危機感つてもものがないの？ いくら顔がいいからって、世の中そんなに甘くないわ。こんな高級宿に泊まるお金があるなら、用心棒の一人でも雇いなさい！ 一人で出かけたのなら、自分の身くらい自分で守れるようにしなさいよっ!!」

最後は鼻息荒く叫ぶ。

「うん、わかったよ」

青年の口から出たのは素直な返事だったものの、ニコニコと嬉しそうな表情は変わらない。

この男には、自分の喝がまったく届いていないのだ——そう感じたアデルは、自分ばかり必死になっっていることが虚しくなると、はあっと大きなため息を吐き出すと彼に背を向けた。

「もういいわ。帰る」

「あっ、アデル！ 送っつい——」

「いいってば！ それじゃあ、貴方をここに案内した意味がないでしょう。私は一人で大丈夫よ。

さようなら」

振り返ることなく彼に別れを告げ、屋敷への道を歩き出す。

ニコラスから逃げ切れたのは良かったけれど、今日はいつもの以上に疲れた。なんとも変わった青年に遭遇したものだ。

自分も風変わりな貴族令嬢だと思っていたが、彼も相当である。

(それとも、文化の違いなのかしら?)

彼がしていたネックレスのプレートは古代文字に似ていて、ラングポート王国のものではなかった。

サリンジャー商会の名を出したときも微妙な反応だったけれど……一体どこの国から来たのだろうか。

(……関係ないわ)

もう二度と会うことはないのだから、考えても意味はない。

でも、一期一会の機会だったのなら、もう少し親切にしてあげるべきだったかもしれない。

アデルは青年と行動していた間の自分の態度を思い出し、ちよつぱり後悔する。

自分は彼の言動に怒ってばかりだった。彼はせっかくの旅を楽しみたかったに違いない。だから、笑顔を絶やさずにいたのではないか。

それなのに……

屋敷に戻ってから、ぐるぐると今日の出来事を反芻する。屋敷から逃げ出した娘を叱る両親の小言も右から左へ抜けていった。

(もう！ 今さらじゃないの！)

過ぎ去ったことをいつまでも考え続ける自分に嫌気が差したのは、湯浴みを済ませ、ベッドに潜り込んだ頃のこと。

こんなにも気になってしまうのは、青年の美しい顔が印象的だったせいだ。予想外に男性的だった彼の体格も……

目に焼き付いた青年の姿を思うと、なんだかそわそわする。

きっとこれは、この国の文化に不慣れな旅人に親切にできなかった罪悪感のせいだ。

(二度と会わないんだから、気にすることないわ)

アデルは堂々巡りの思考を吹き飛ばすかのように息を大きく吐き出す。

そうだ。どうにもならないことを気にしても仕方がない。

どんな出来事だったって、後から思えばなんとなく「あれもいい経験だった」ということになる。旅の道中だったならなおさらだ。

アデルはそう聞き直って、ぎゅっと目を瞑った。

\*\*\*

翌日。

アデルはいつも通りに起床し、朝食を済ませ、自室でくつろいでいた。もちろん、今日もニコラスが来たときのために逃走準備はしてある。

彼にも仕事があるので、毎日来るわけではないのだが、備えあれば憂いなしだ。

(次はいつ買い付けに行くのかしら?)

ニコラスが外国へ買い付けに行けば、最低でも数日は平和な日々が過ごせる。

そんなことを思いつつ、昨日読みかけた本を開いたとき――

カタカタカタ、と窓の外から馬車の走る音が聞こえてきた。

アデルは慌てて椅子から立ち上がる。

ニコラスがこれほど朝早くからやってくるなんて珍しい。

(どうしてこんな時間に?)

窓に近づいて外の様子を窺った。そして、見えてきた馬車に首を傾げる。

(あれ……?)

遠目に見えるのは、金色の装飾が上品な白い馬車だった。ニコラスのそれとは似ても似つかない。箱を引いている馬も真っ白だ。

(今度は馬の毛を染めたの? でも、あの馬車の装飾……)

ダサくない。

ニコラス・ダサリンジャーがまともなデザインの馬車に乗っているなんて、おかしい。

アデルが呆気にとられているうちに、馬車はプランケット邸の門の前までやってきた。

(はっ! ま、まずいわ。早く逃げないと! ニコラスだったら大変――)

開いたままだった口を閉じ、踵を返そうとしたところで、彼女は再び硬直する。

なぜなら、馬車から降りてきた人物が意外な人だったから。

風になびく金髪に、すらりとした体軀――一晩眠って忘れたはずの彼だ。その後ろから付き人らしき格好の男性も降りてくる。

いつもと違う馬車にばかり目がいついていたものの、馬車の後ろには同じ格好の人が何人もついてきていた。

(えっ? な、なんで……)

アデルは驚いて部屋を飛び出す。

あの青年は一体なんの用があつてプランケット家を訪ねてきたのだろう。しかも、豪華な馬車に乗り大勢の従者を引き連れて。

彼はただの旅人ではなかったのかもしれない。いや、確実に違う。この行列を見ても、彼が貴族と同等、もしくはそれ以上の立場にあると容易に想像できる。

だとしたら、昨日の対応は、かなりまずかったのでは……？

階段を駆け下りながら至った結論に、アデルは青ざめる。

玄関では、使用人に呼ばれたらしい両親が同じように青ざめた顔で娘を待っていた。

「アデル……！ お、お前、アーバリー王国の王子に、何か、失礼を……」

父、ポールが声を震わせて玄関扉へ視線をやる。アデルも釣られてそちらに顔を向け、その向こうにいるだろう人物の姿を思い浮かべた。

「アーバリー王国の、王子……？」

アーバリー王国はラングポート王国の隣に位置する大国で、高い軍事力を誇っている。

ラングポート王国とは友好的な関係が続いているが、国王も王子たちもかなりの武人だと聞く。

その証拠に、三人いる王子たちはそれぞれ軍隊を指揮しているはずだ。

その王子が昨日の彼……？

大陸一の軍隊を率いているなんて、あの青年の情けない様子からは到底想像できない。

「あ、あの人が……？」

アデルは伯爵令嬢と言っても、他国の王族との交流なんてないに等しく、隣国の王子の顔など知らなかった。

彼は路地裏でおろおろしてばかりで、王族の威厳など皆無だったというのに……

しかし、身体を鍛えているのは確かだ。綺麗な顔立ちとは対照的な男性らしい腕をこの目でしっかり見た。宿の前でローブを脱いだときに感じた凍りついたような霧囲気も……

「心当たりがあるのね？ どうしまししょう！」

呆然とした娘の吹きを聞いて、母のマーガレットが両手で顔を覆う。ポールも額に手を当てて悩ましげに唸った。

「で、でも、私、悪いことをしたわけじゃないわよ」

態度に問題はあったかもしれないが、どちらかと言えば彼を救ったのだ。

暴漢を追い払い迷子になっていたのを宿へ送り届けたのだから、礼を言われるのならまだしも責められる理由はない。

「それなら、なぜ王子が直々に屋敷を訪ねてくるんだ！ あんなに従者を従えて……何か余計なことをしたとしか思えんぞ」

娘の性格を熟知している父は痛いところを突いてくる。

「それは——」

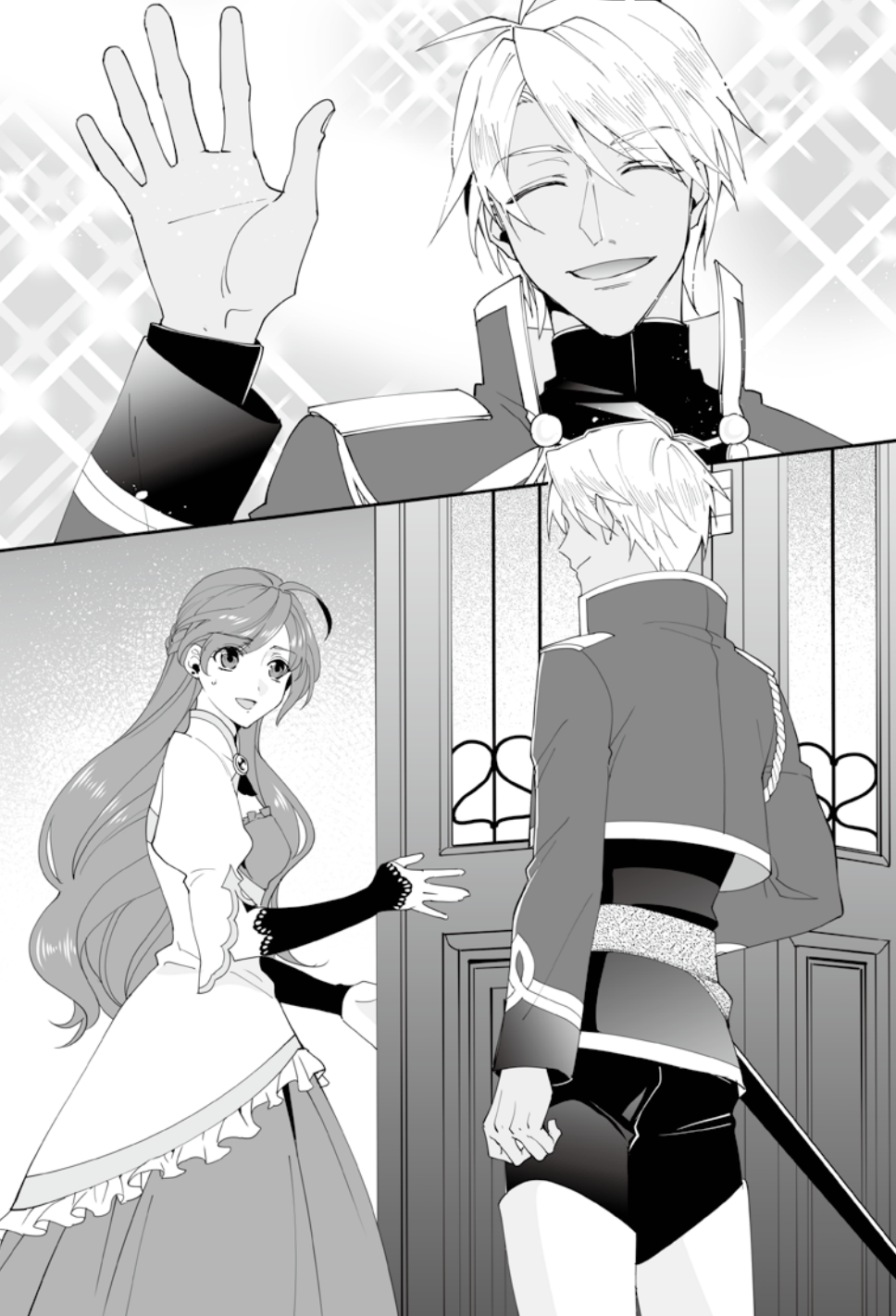
「あ、あの……お話し中に申し訳ありませんが、セドリック王子をこれ以上お待たせするわけには……」

親子が狼狽しているところに、使用人がおずおずと割って入ってきた。

「セドリック王子は、アデル様にお会いしたいとおっしゃっていますが……」

「わ、わかったわ。私が出るから、ひとまずお父様とお母様はここで待っていて」





指名されたのならば都合がいい。自分の失態は自分で対処しなければ。

ゴクリと唾を呑み込んで、アデルは玄関の外へ一歩踏み出した。

「あ！ アデル！」

そこに立っていた王子は、昨日と変わらない爽やかな笑みを浮かべ手を振っている。

「昨日は名乗りそびれちゃってごめんね。私はアーバリー王国の第二王子、セドリック・フォン・アーバリーだ。よろしくね」

そしてセドリックは恭しく礼をしながら自己紹介をした。

彼が着ている黒いシャツとストラックス、赤のジャケットはアーバリー王家の正装だ。

返り血が目立たないように赤と黒を使っているというのは、嘘か真か。軍隊の制服と王族の正装は別なのでただの噂だろうが……アデルはちらりとそんなことを思い出していた。

王子の顔までは知らなくても、それくらいの知識はある。また各国の王家の正装を式典などで遠目に見たことはあった。

ただ、国外といえ一貴族の邸宅を訪ねるのに、なぜ正装なのか。

間近で見ると、金色の装飾や刺繍が華やかだ。

「あっ！ わ、私はアデル・プランケットです。昨日は大変な失礼を……」

セドリックが咎めるためにやってきたわけではないとわかり、ひとまずホッとすする。

しかし、王子に先に名乗らせてしまったたり、初対面の男性に対して不躰な物言いをしてしまったりしたことに変わりはない。

「謝る必要はないよ。むしろ、謝罪すべきなのは私のほうだ。お礼が遅くなってしまつてごめんね。これを」

「あ、ありがとうございます」

差し出された箱を受け取ると、セドリツクの後ろから従者が出てきて、もう一つ箱を置く。

「それは二人の男から私を助けてくれたお礼、これは私を宿に案内してくれたお礼。あと、貴女に似合いそうなドレスと靴とネックレスと——」

「え？ え？ あのっ」

ポン、ポン、ポンッと、彼が連れてきた従者たちが一人ずつ持っている箱を玄関先に積み上げていく。

どんどん高くなるプレゼントの山を見て、アデルは頬をヒクつかせた。

「こ、こんなにいただけません」

彼女のその言葉を無視して、セドリツクが再び何かの箱を差し出す。

「それで、これが私を怒ってくれたお礼」

「……は？」

最初の二つのお礼はわかる。「似合いそう」という理由で選んでくれたプレゼントも、感謝の気持ちを表しているのだろう。

しかし、今のはなんだか変な理由だった気がする。

「あの、最後の箱はなんのお礼とおっしゃいました？」

聞き間違いだつたら恥ずかしいので、アデルは念のために聞いてみた。すると、セドリツクが赤らんだ頬を指で掻きながら答えてくれる。

「最後の箱は、私を怒ってくれたお礼だよ」

「……受け取れません」

咄嗟に出た拒否の言葉は、かなり低い声になった。

だが、一つ目の箱を両手で持っているせいで、最後の箱を突き返せない。「私を怒ってくれたお礼」という恐ろしいものが、プレゼントの山の頂上に積まれてしまう。

さらに、最後に出てきた従者がアデルの持つ最初のお礼もその山に加える。

「アデル」

セドリツクが跪き、胸ポケットから小さな箱を取り出した。

「そして、これは婚約指輪だよ」

「は？ え？ 婚約!?!」

またかなりぶつ飛んだプレゼントを用意したものだ。

「私は貴女に一目惚れをした。私の婚約者として、ぜひ国に連れて帰りたいたいと思っているんだ。アデル、私と結婚してほしい」

彼が開けた箱の中身は、大きなダイヤモンドがついた指輪だった。

「ひ、一目惚れ？ けっ、結婚!?!」

「うん、そう。結婚」

アデルの声が引っくり返る。

目をまん丸にして驚く彼女に、セドリックは満面の笑みで頷いた。

「ちょっと、待ってください。いくらなんでも話が飛びすぎです」

下り坂を転がり落ちるかのような急展開に、アデルの頭は追いつけない。でも、この華やかな衣装の理由はわかった。

「そうかな？」

「そうです！ 大体、一目惚れって、私のどこに……」

ダークブラウンのカールした髪に、それと同じ色の瞳。肌は白いほうだが、吊り目ではっきりした顔立ちが「気が強そう」だと男性には不評だ。

「どこって、全部かな？ 髪の毛はふわふわで可愛らしいし、意志の強そうな瞳はグツとくる。私を叱ってくれる声も毅然とした態度もかっこ良くてぞくぞくするよ」

セドリックは恍惚の表情で彼女を褒める。お転婆だと敬遠されがちな言動まで彼の心に刺さってしまったらしい。

女性に叱られるのが好きであると聞こえる発言は、正直気持ちが悪かった。

「それは光栄です……でも、私は自分より弱い男性を好きになれません。それに、お気持ちはありがたいですが、私みたいなお転婆娘が王子様の妃になるなんて、皆が反対するでしょう。セドリック様は旅先でちょっと気分が高揚しているだけです。一度冷静になったほうがよろしいかと思いません」

アデルはできる限り丁寧な言葉を選びながら、隣国の王子の求婚を断る。

だが、彼はそれを聞いて「ああっ！」と叫び、仰け反った。片手で心臓の辺りを押さえ、もう片手を顔の前に掲げて目を細めている。

太陽は彼の後ろ側にあるというのに、一体何が眩しいというのだ？

「その強気な態度！ 冷たい視線！ 丁寧な言葉遣いと温度差がすごくイイ!!」

「えっ？ 気持ち悪い」

先ほど心の中で思ったことが、今度は口に出ってしまった。

すると、セドリックがその場に膝をつき、口元を手で押さえて肩を震わせる。

王子である彼は、女性に「気持ち悪い」と言われたことなどないだろう。

地面に崩れ落ち身体を震わせるとは、相当ショックが大きかったに違いない。いくらなんでも王子に対する発言として不適切だった。

「あの……すみません。さすがにちょっと言いすぎ——」

アデルが謝ろうと身を屈めたところ、ポタリと地面に染みができる。よく見ると、王子の手から赤い雫が零れていた。

「え!? ちよっ、ち、血が!」

ぎよっとした彼女は、狼狽しつつハンカチを差し出す。すると、それを受け取ったセドリックが顔を上げた。

「ありがとう……はあ、失礼。興奮して鼻血が……」

「は!？」

彼はハンカチを鼻に当て、うっとり目を細める。

「いや、気持ち悪いなんて言われたのは初めてで……あ、いい匂い……」

「ぎゃーっ!? や、やめて、使わないで——」

アデルは慌ててハンカチをひったくったものの、お気に入りの花柄は赤く色を変えている。思わず淑女らしくらぬ悲鳴を上げてしまった。

「い、いやあああああ!」

王子の血に濡れたハンカチを投げ捨てて叫びながら屋敷へ逃げ戻り、思いつきり玄関の扉を閉める。

「ア、アデル様!？」

「鍵を閉めて! あのだM王子を屋敷に入れたらダメよ!」

困惑する使用人に向かって叫び、階段を駆け上がった。後ろから両親が何か叫んでいたようだが、それを聞く余裕など彼女にはない。

——無理だ。

女性に怒られて嬉しそうにしたり、「気持ち悪い」と蔑まれて興奮し鼻血を出したりする王子なんて! —

ましてや、そんな男と結婚など——

「——絶対に嫌!!」

自室まで一目散に駆け、乱暴に閉めたドアを施錠する。窓も同様に閉じカーテンも閉めて、アデルはベッドに飛び込んだ。

震えが止まらない。

こんなことならば、両親の言いつけを守っておとなしく伯爵令嬢としての教育を受けていれば良かった。

城下町で皆にチャホヤされていい気になっていたから、天罰が下ったのだろうか。

今さらながら自らの行いを後悔する。

あらゆる流行の先駆者でありながらダサイ商人に、女性に罵られて鼻血を出す隣国の王子。

変人にばかり好かれてしまうのは、彼女が貴族社会に溶け込めない変わり者であるせいな気がしてきた。

だが、いくら類は友を呼ぶと言っても、自分はあるにひどくない……と思う。彼らとは友達になるのだってお断りしたい。

(結婚なんて絶対にしないわ)

どんなに変わり者だと揶揄されようと、変態と添い遂げるより一生独り身でいるほうがマシだ。

枕を力強く抱き締めて、アデルはそう心に誓った。

\*\*\*

翌朝。

アデルはベッドの上でぼんやりと視界が定まるのを待った。

いつもの起床時間ではあるが、昨日の出来事を何回も夢に見たせいで、寝不足である。霞がかつた視界がだんだんと晴れていくと部屋の隅にプレゼントの山が見えて、ますます気分が重くなった。「……夢じゃない」

目頭を押さえ、項垂れる。

あの鼻血騒動の後、セドリックはアデルの両親に挨拶をして帰ったらしい。

どんな技を使ったのか、彼はプランケット伯爵夫妻の懐に入り込み、プレゼントをすべて彼女の部屋へ運ばせた。

(お父様もお母様も単純なんだから！)

娘の粗相を心配していた二人は、思わぬ出来事に歓喜している。

嫁き遅れに片足を突っ込んだ娘への求婚——しかも、それが隣国の王子からの申し出となれば、断る理由などない。

(いいえ、あるわ。あの人はドM王子なのよ。それだけで十分、私には拒否する理由になる)

舞い上がっている両親をどうにかして説得しなければ。

フンツと鼻を膨らませ、アデルは勢い良くベッドから抜け出した。枕元の紐を引き、世話係を呼び出す。

すぐにやってきた彼女に着替えを手伝ってもらい、リビングへ下りた。

なんだか扉の向こうが賑やかなことを怪訝に思いつつ、中へ入る。

「——そうしたら、アデルが颯爽と現れて、私を暴漢から救ってくれたのです！ ああ、なんて勇敢な女性だ。美しく可憐でありながら逞しい花。私は彼女に一目惚れました」

「まあまあ、そんなふうに言っていただけで光栄ですわ。ご存じの通り、娘は淑やかさとはかけ離れていて……なかなか縁談が決まらず心配していたのです。けれど、それもセドリック様に出会うためだったのですね」

「ええ。私もこの出会いには運命を感じています」

「不束な娘ですが、よろしくお願ひ——」

「ちよおおおっと、待ったああ！ 勝手に話を進めないで!!」

一体どこから突っ込めばいいのやら。

アデルはひとまず、勝手にまとまりそうだった話を遮った。そして、くつろいだ様子でテーブル席にしているドM王子——もとい、セドリックを睨みつける。

「どうしてセドリック様がここにいるのですか!？」

「やあ、アデル。おはよう。今日も美しいね」

彼はひらひらとアデルに向かって手を振っていた。その向かい側に座っていた母、マーガレットも振り返り、微笑んだ。

「あら、アデル。おはよう。セドリック様が朝早くから貴女を訪ねてくださったから、朝食を一緒にとご提案したのよ」

おっとりした母の口調に、娘は項垂れる。

普通、こんな時間に来訪する人間がいたら、非常識だと怒るところだ。王子だから無下にできないとしても、朝食にまで誘うなんて。

マーガレットは生粋のお嬢様で、ちよつと天然なところがある。彼女は親が決めた縁談でプランケット家に嫁いだのだ。

だが、両親の仲はいい。

伯爵家の当主として厳しく育てられ、やり手と評判の父、ポールと、のんびりとマイペースな母、マーガレット。

正反対のようだけれど、バランスが取れている。

ポールの仕事が行き詰まっても、母は「なんとかなる」と気楽に考え、父を責めたりしない。一方で、ぼんやりしている彼女の手は、ポールがしっかりと引いている。

自分にはない部分を補い合う。そんな夫婦関係は、理想的でもある。

「お母様、どうしてセドリック様を招き入れたのですか？ セドリック様もこんな朝早くから訪ねてくるなんて、どうかと思います。それに、お父様はどちらに？」

「お父様はもうお仕事へ行きました。今日はサリンジャー商会の船が朝早くに到着するとおっしゃっていたわ」

「プランケット伯にも朝食にお邪魔する許可はいただいているよ。ちよつとお出かけになるところだったのね」

二人はそれぞれに答え、穏やかな笑みを浮かべて紅茶を啜った。呆れるほどに息がピッタリである。

父がいれば自分の話も聞いてもらえるかもしれないと思っていたのに、直接セドリックに会っていたと聞き、アデルは危機感を覚えた。

そもそもニコラスを宛てがおうとした時点で、ポールは正常な判断能力を失っていると考えるべきだったかもしれない。

お転婆娘と有名で貰い手が見つからない娘の将来を憂えていたところに、王子の求婚。ポールが商人と王子どちらをとるかなど明白である。

これはまずいことになった。

「お母様！ 昨日のセドリック様とのやりとりは、見ていらしたのでしょうか？ お父様も……セドリック様は私に怒られて喜ぶような人よ。変だと思わないの？」

本人を前にしてかなり失礼な発言だという自覚はあるが、それで諦めてもらえるのなら構わない。そんなアデルの必死の抵抗にも、残念ながらセドリックはまったく不快そうな表情を見せなかった。それどころか、照れて頬を染め後頭部を掻いている。

マーガレットも小首を傾げて、不思議そうな顔だ。

「貴女のことを受け入れてくれる、とても素敵なお方だ。お父様も喜んでいたら。セドリック様は偏見のない、寛大で素晴らしいお方だ」

「寛大……」

物は言いようとは、まさにこのことだ。

アデルは頬をヒクつかせた。

「しつかりしてよ、お母様。絶対におかしいでしょう！ 私に『気持ち悪い』と言われて鼻血を出すような人なのよ！」

「あら。鼻血くらい珍しいことじゃないわ。ポール様だって私と初めて——」

「それは私が聞いてはいけない話だと思うわ」

自然な流れで夫の秘密を暴露しようとするマーガレットを遮って、アデルはテーブルに両手を置く。

ガタガタッとテーブルが揺れるのに合わせてティーカップが震え、紅茶が波立った。

「とにかく！ セドリック様みたいな情けない人はお断りです。強くて頼れる男性が見つからなければ、一生独り身で構わないわ」

「まあ！ それはダメよ。プランケット家の存続にかかわるわ」

「それを言うのなら、ますますセドリック様は私の夫にふさわしくありません。彼はアーバリー王国の王子なの。プランケット家に婿養子として入れる立場ではないでしょう」

アデルはちょうど良い断りの理由を見つけて、フンと鼻を鳴らす。

セドリックはアデルを自国へ連れ帰って結婚したいと言った。彼は王子で、後継ぎを求められる立場である。仮にアデルが嫁いで彼の子を産んだとしても、その子にプランケット家を継がせることはできない。

「それなら心配いらないよ」

ところが、今度はセドリックが口を開いた。

「私は第二王子で、王位継承権は第一王子の兄にある。兄は二年前に結婚し、その後すぐに息子に恵まれた。第二子ももうすぐ生まれる予定だ」

近々、隣国の第一王子が戴冠するという噂は彼女も知っている。セドリック曰く、兄もその息子も健康で、彼に王位はほぼ回ってこないそうだ。

「私はアーバリー王国の軍を率いる予定だけれど、第三王子の弟とともにやっていくことになるから、必ずしも子を後継ぎに据える必要はないよ。それに、私は三人くらい子が欲しい！ その中で、プランケット家の商才を一番濃く継いだ子を当主にと考えているんだ。もちろん、やりたいという子がいれば希望は聞くよ」

したり顔で片目を瞑ってアピールしてくるセドリックに、アデルは開いた口が塞がらない。

まだ結婚を承諾すらしていないのに、勝手に家族計画まで立てているなんて、一体どういう神経をしているのだ。

一方のマーガレットは、胸の前で両手をパンツと合わせ、ご機嫌な様子だ。

「とつてもいい案でしょう？」

「よくありません！」

ぴしやりと言うと、母は眉を下げて瞳をうるうるさせた。

「う……そ、そんな顔にしてもダメよ」

美人の泣き顔は良心に刺さる。

アデルはしおらしい母の表情にたじろいだ。

目尻に皺しわが目立つてきたとはいえ、実年齢より若く見える肌の艶つや、大きな目に小さな鼻と唇。我が親ながら、美しい女性である。

腫の色こそ母譲りだが顔立ちは父親似のアデルは、いつも母の容姿を羨うらやまましいと思っていた。

「そうよね……ごめんなさい、アデル。私が男の子を産めなかつたせいで、貴女あなたに責任をとらせるようなことに……いいの。私がいけないのよ」

「それはお母様のせいじゃないわ!」

「でも、私は後継ぎを産むというお役目を果たせなかつたから」

マーガレットとボールの間にはなかなか子供ができず、母は苦勞をしたと聞いている。アデルを身籠みこもつたのは結婚して随分経つてからで、その後、母が懐妊することはなかつた。

それが原因で彼女は生家と疎遠になっており、アデルも母が肩身の狭い思いをしていることを知っている。

特に祖父は、男子を産めなかつたマーガレットを一家の恥だと切り捨てた。

(男の人って……)

もちろん全員がそんなひどい人ではない。

だが、身近にそういう男性がいることで、アデルは少なからず「結婚」がもたらす悲劇を知ってしまった。

俯うつむく母を見つめ、両拳りょうこぶを握り締める。

マーガレットの劣等感を刺激した自分の浅はかな発言を後悔した。

「そんなふうに言うのは感心しませんね。生まれてきたアデルに対して、何より命懸けでアデルを産んだ貴女あなた自身に対して、失礼な言葉だ」

しばらく続いた沈黙を破つたのは、セドリックだ。

驚いたアデルは、彼に視線を向ける。

柔らかな口調は変わっていないのに、彼の纏まとう空気がピリッと締まった気がする。その目がとても真剣なせいだろうか。

それに、そんなことを言ったのは、彼が初めてだ。

今までも後継ぎの話題が出たことは多々ある。アデルはそのたびに落ち込む母を慰なぐさめていたが、いつも「お母様のせいではない」としか言えなかつた。ただ寄り添うことしかできない自分をもどかしく思っていたのだ。

自分が男だったら、母は悲しい思いをせずに済んだのに——そう考えたことは、一度ならずある。ボールもきつと同じだろう。

妻が傷つく姿を見て、責任を感じているのだ。プランケット家に迎え入れなければ、あるいは——と、酒に酔った父が吐露とらしているのをアデルは聞いてしまったことがある。

両親も娘も皆、それぞれ自身を責めていた。そんな中、セドリックは誰も否定しない。



彼は「男子を産めなかった」のではなく「女子を産んだ」ことの価値を思い出させてくれた。そうして、アデルが生まれたことを肯定する。

心の中で引つ掛かっていた何かが溶けていくような感覚に、彼女は思わず胸に手を当てた。そこから伝わる鼓動は少し速い。

マーガレットも顔を上げ、驚いた表情で王子を見つめる。

すると、ふいにセドリックが席を立ち、マーガレットのほうへ近づいた。

「少なくとも、私は貴女にとっても感謝しています。私がアデルに出会えたのも、貴女が彼女を産んでくださったから。立派に育ててくださったおかげですからね。今日まで彼女をお嫁に出さずにいてくださったことも含めて……ありがとうございます」

彼女の隣に跪き、その手を取って甲に口づける。

「……そうよね。ごめんさい。私つたら……アデルも、ごめんね。私は貴女が生まれてきてくれて幸せよ。それは間違いないわ」

「私も、お母様の子で良かったわ」

母に笑顔が戻り、アデルも頬を緩めた。

「セドリック様、ありがとう——」

「それに、心配は無用です。アデルと私でプランケット家をより繁栄させてみせましょう！ 私には確信があるのです。アデルと私はきつと相性がいい。子宝にもすぐに恵まれるでしょう」

「え……？」

せつかくちよつと見直したところだったのに、根拠のない自信を前面に押し出す王子に、アデルの中ですうつと何かが引いていく。

感動を返してほしい。

それなのにセドリックはくるくると回ってこちらに近づき、彼女の腰を抱いた。

「気安く触らないでください」

「ああ……！ アデルが与えてくれるものならば、痛みすら愛おしいね」

べしつと腰に添えられた手を叩くと、彼はアデルが触れた手の甲を頬に擦り付ける。

「気持ち悪いことを言わないでください。そんな簡単に子孫繁栄を約束するのはどうかと思います。後継ぎができるかどうか、生まれてくる子が男か女かだつて生まれてみなければわからないのに、無責任です。大体、私は貴方と結婚すると言っていますせん」

彼女が思いきり顔を背けると、セドリックがくすつと笑うのが聞こえた。

「後ろ向きな考えは良くない。私はアデルとなら素晴らしい家族になれると思う。生まれてくる子は男でも女でも構わないんだ。最近では女性を君主に据える国もあるし、子供に恵まれなくても人生が終わるわけではない。いつだつて何かしらの解決策はある。要は、それを一緒に考えられるかどうかだと私は思うよ」

人の上に立つ者だからなのか、セドリックの考えはアデルの周りにいる人たちとは少し違う。

彼らが今さらどうにもならない事柄に悩んでばかりだったのに対し、彼はこれからどうするかを考えている。

常に未来を向いている、そんな彼の姿勢は尊敬できた。

「……前向きなんですね」

「惚れてくれたかな？」

思わず口をついて出た言葉を拾い、王子が明るい声を出す。

変わっているのがそれだけならば、アデルは二つ返事で彼と結婚したかもしれないが……

「そんなことでは絆されません！」

「あつ、今の言い方……すごくいい！ 胸に刺さる！ じんじん来る！」

くうつと苦しうに蹲る王子を尻目に、アデルはようやく自分の席についた。

セドリックは恍惚の表情で胸を押さえ、「その呆れた視線も痺れるな」なんて変なことを言いながら自分の席へ戻る。

「あらあら。アデルとセドリック様は仲良しね。出会って間もないのに、こんなに息の合ったやりとりができるなんて、運命は本当にあるのねえ。うふふ。私も当てられちゃいそうだよ」

「お母様……どこをどう見たらそうなるの？ っつて、セドリック様は本当にここで朝食をとるおつもりですか？」

一連の会話が一段落する頃を見計らっていたのか、ようやく運ばれてきた朝食は三人分だ。

アデルは当たり前のようにテーブルについている彼をじとりと睨む。さすがの彼も悪いと思ったのか、苦笑しつつ困った様子で頬を掻いた。

「やはり、母娘の団欒に水を差すのはいけないかな」

「そんなことありませんわ。お食事はみんなでしたほうが美味しいですもの。それに、もう用意してしまいましたから、どうぞ召し上がっていただくさい」

マーガレットがそう言うと、セドリックはアデルのほうを見て首を傾げた。彼女の許可を待っているらしい。

屋敷で二番目に決定権のある母がいいと言っているのだ、アデルがなんと言おうと関係ない。それでも彼は、彼女に許しを請うていた。

じつと彼に見つめられ、なんだかそわそわしてくる。

「王子様のお口に合うかはわかりませんが、どうぞ。でもつ、食べたらずぐに帰ってくださいね！」

早口にそう言うと、彼女は自分のスープに集中した。

（お母様のことを元気づけてくれたもの）

セドリックは変わり者だが、母と自分の心を軽くしてくれたことは間違いない。そのお礼くらいしても、罰は当たらないだろう。

そう自分に言い聞かせる。

「ありがとうございます」

きちんと挨拶をし、セドリックは綺麗な所作で食事を始めた。

王子としての教育を受けているのだから当たり前かもしれないが、丁寧で行儀の良い彼の所作は素晴らしい。

王城の食事より質素だろうに、文句を言わないどころか、「美味しい」と言ってお腹を満ちかかす。

お抱えシェフの料理は、プランケット家の自慢の一つでもある。アデルが作ったわけではないが、褒められれば嬉しい。

彼は王子という地位をひけらかすことはなく、気遣いもできる。真面目に彼女の話を聞き、答えてくれる。

セドリックはしっかりと自分の考えを持つ大人の男性だ。

昨日はわからなかった彼の一面を知ってしまい、アデルはなんだか落ち着かなくなった。

（顔もいいし、ニコラスみたいにダサイわけじゃないし……って、違う！ お付きの人がいるからよ。ダサくなりようがないわ。それに、ドM！ セドリック様はドM王子なの！ 騙されたらダメよ、アデル）

つい結婚相手としての条件を考えてしまった彼女は、自分の考えを振り払おうと首を左右に振った。

朝食を終えたら、速やかにお引き取り願おう。

セドリックだって、この短い休暇期間に本気で彼女とどうこうなれるとは思っていないはずだ。

所詮は王子の戯れである。

そうでなければ、何かの陰謀——？

（そんなわけないわよね）

隣国の王子が他国の伯爵家に何を求めるといふのだ。

アーバリー王国のような大国が、一伯爵家の貿易権や造船業に興味があるとも考えにくい。

プランケット家がもたらす利など、たかが知れている。わざわざ隣国の伯爵領に手を出さずとも、彼らには彼らのルートがあるのだ。

どちらにしろ、アデルはセドリックに嫁ぐつもりはない。

食事の後に再度お断りしようと決意しつつ、彼女は残りのスープを飲み干した。